

北海道国際理解教育研究協議会 会報 第107号



国際理解

令和6年2月発行 北海道国際理解教育研究協議会 会長 小松 裕和



特集

～令和5年度冬の研修会～

「第2回理事会総会・研修会」

「帰国教員報告会・派遣予定教員研修会」

令和5年度冬の研修会 「帰国教員報告会及び派遣予定教員研修会」

令和5年度「冬の研修会 帰国教員報告会及び派遣教員研修会」が、令和6年1月9日（火）に独立行政法人国際協力機構北海道センター（JICA 北海道・札幌）を会場に対面及びオンライン形式で開催されました。本研修会は、以下の二つを目的として毎年開催されています。

- ・ 帰国教員が在外教育施設における教育の実情及び現地での教育実践等についての報告を行い、在外教育施設や世界の教育活動について視野を広げ、今後の本道における国際理解教育の充実を図る。
- ・ 在外教育施設派遣教員として本道より派遣される教員に対し、在外教育施設の現状、現地での生活の様子及び派遣に係わる準備等について研修を行い、派遣教員としての自覚の高揚と資質の向上を図る。

当日は、全道理事会総会研修会、全体研修会も開催され、派遣予定者をはじめ各地区役員など、全道各地から多くの方々が集まりました。また、オンラインでも多くの方が参加いたしました。

令和5年度「第2回理事会総会・研修会」

会長挨拶 小松 裕和 会長より

皆様、あけましておめでとうございます。

全道大会から2か月が経ちましたが、会同して生の授業を見ながら子どもたちの様子を語るのは、やはりいいものだなと実感させていただきました。

改めて、十勝地区の野中会長様に御礼申し上げます。

さて、令和6年の幕が開きましたが、今年は年始早々に石川県能登半島での大きな地震、翌日の日航機事故とこれまでにない不安な年明けとなってしまいました。皆様方の中に関係者がいないことを願っております。

また、亡くなられた方々には心よりご冥福を申し上げますとともに、被災された方々にも1日も早い復興を願うばかりです。

ただ、今年は辰年ということで、上り龍に象徴させるように様々なものが好転する年とも言われています。

日本に目を向けると、経済の転換期を迎え、デフレ脱却を願うばかりですし、ウクライナ・ロシア戦争、イスラエル・ハマスの紛争など早い終息を願うばかりです。悪いニュースもありましたが、大谷翔平選手のドジャーズ移籍と1000億円を超える最高年俸額や八村塁選手の活躍などスポーツ界では日本人の活躍に勇気をもらっています。

今年も、いろいろな所で日本人の方々が活躍する姿が見られることを期待しています。

話は変わりますが、来年度の在外教育施設への派遣に関わっては、派遣者数が400名程度予定されておりますが、その半数近くがシニア派遣者となるようです。

今後は、全派遣者の半数近くがシニア派遣者になるのではということです。これは、日本の学校でも再任用教諭や期限付き教諭でシニアの方々が活躍されているように在外でも同じような傾向が強まってきます。

ただ、それに伴う様々な問題も報告されておりますので、派遣される方の協調性がより一層求められます。

また、現在の全海研については、今後NPO法人から一般社団法人へ格上げをし、文科省からの直接的な業務委託等ができるように変更していきたいという話です。

それに伴い、私たち各地区との基本的な関係は変わりませんが、全海研への登録や全海研会費等の取り扱いは、今後話が出てくるものと思われまます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

R5 全道研究大会十勝・帯広大会を終えて 十勝地区 野中 利晃 会長より

4年ぶりの対面での開催で、本当に多くの成果を挙げることが出来たとのこと挨拶がありました。十勝地区国際理解教育研究会ホームページにある「研究集録」をぜひご覧ください。



R5 事業報告・R5 会計中間報告

全道研究大会だけでなく、運営の改善など、様々な成果がありました。配付資料をご覧ください。

R6 年度事業計画・R6 事務局運営金分担について

R6年度から本会の年間運営金を50万円から45万円に減額し、各地区で分担するという変更点についてお知らせがありました。併せて、R6年度からの「帰国報告集」をデータ配付にする旨の連絡がありました。

R8 年度までの開催地確認と R9 年度以降の全道研究大会開催依頼について

R6年度の胆振・苫小牧大会に向け、準備がスタートしています。また、R9年度の立候補に向けて、ぜひ各地区でご検討ください。

R6 全道研究大会課題別分科会について

- ①「総合的な学習の時間や国際交流、国際協力を通じた国際理解教育の実践」
- ②「教科等を通じた国際理解教育の実践」
- ③「外国語活動を通じたコミュニケーション能力をはぐくむ国際理解教育の実践」

上記3課題の発表担当地区について、それぞれの2枠のうち1つずつを札幌地区が担当することになりました。残りの各課題1つずつの発表担当につきまして、ぜひ各地区で発表担当をご検討ください。

R6 全道研究大会胆振・苫小牧大会に向けて 胆振地区 高橋 慎治 会長より

胆振地区の高橋会長様よりご挨拶がありました。十勝地区事務局との引継ぎ、授業者等の選定・調整を鋭意進めているとのことでした。10月31日（木）、11月1日（金）の全道研究大会の参加・協力に向けて、ぜひよろしくお願いいたします。

各地区研究推進交流、R6 役員選考委員会

関本道研究部長を中心に、現在の各地区研究推進についての進捗や困りごと、上記の課題別分科会についてなどが話し合われました。

また、同時進行で小松裕和現会長の退任（役職定年）に伴い、本会規約に則り役員選考委員会が開催されました。満場一致で現井上博文事務局長（札幌市立手稲東中学校校長）が新会長に推薦され、ご挨拶がありました。

冬の研修会「帰国教員報告会・派遣教員研修会」

全体研修会

【演題】 「海外勤務の心得」

【講師】 枝幸町立枝幸小学校 校長 虻川 康士 氏
(前蘇州日本人学校校長)



蘇州日本人学校校長として、日本人学校に赴任するまでの経緯や中国での経験をお話いただきました。当時はコロナ禍が始まった年であり、過去にはない苦労や努力があったことが伝わってきました。日本にいと見えてこない内容もあり、とても貴重な学びの機会となりました。ハイブリッドで開催し、多くの方にご参加いただきました。

○コロナ禍での派遣状況

事前にZOOMでの会議

前例がない中で進めた教育活動

日本人学校によって取組は様々

毎日のPCR検査などの感染症対策

○在外派遣で見た課題

特別支援教育が必要な子どもの受け入れ

「日本を知らない」子どもへの対応

優秀な人材の確保の手立て

質の高い授業を目指すには



帰国教員報告会・派遣予定教員研修会

「帰国教員報告会」では、今年度春帰国された11名の先生方からの帰国教員報告会がありました。中国、東南アジア、西・南アジア、ヨーロッパ、アメリカ州・オセアニア州の5つの地域別部会に分かれての報告会で、各日本人学校の実践を聞き、その国の特色ある教育がよく分かる紹介でした。派遣国の文化や風土、おすすめポイントなどの紹介もあり、各国の様子も伝わってきました。



日本と異なる環境の中、苦労を重ねながらも現地で学ぶ子どもたちのために、よりよい教育に取り組んできた熱意が伝わる報告会となりました。

「派遣予定教員研修会」では、地域別に6つの部会に分かれ、派遣予定者と派遣経験者が、在外教育施設の現状や現地での生活の様子、派遣に向けた準備などを交流しました。



派遣予定者と経験者が、顔を合わせて情報交流を中心に行うこの研修会は、北海道国際理解教育の実践的な研修の場として、とても意義あるものとなっています。

派遣される皆様方の、今後の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

今年度の活動を終えて

北海道国際理解教育研究協議会
会長 小松 裕和

令和5年度の北海道国際理解教育研究協議会の活動は、第44回北海道国際理解教育研究大会十勝・帯広大会を柱に、各地区の支部研究大会と併せ無事に終えようとしております。今年度の十勝・帯広大会では、全道から300人近い方々に参集いただき、活発な討議をいただきながら盛会のうちに終えることができました。



また、令和6年度につきましても、胆振・苫小牧地区にて、第45回北海道国際理解教育研究大会の開催を予定しております。徐々にではありますが、各地区の活動が活発になることで新会員の方々も増え、本会としての活動もより豊かなものになっていくものと信じております。

さて、グローバル社会、少子高齢化社会、情報化社会、格差社会、高学歴社会……。現代を象徴するような言葉ですが、このような社会の中で「どのように生きていけばいいのですか。そのためには、どんな資質や能力が必要ですか」というような問いに対して、私たち教師は何と回答するでしょうか。

ある先生は「自分のやりたい夢に向かって、勉強をがんばろう。」と答え、また別な先生は「人とのかかわりが上手になれるといいよ。」と答えるでしょう。他にも「自分の考えをしっかりとと言える人」「コミュニケーション力が高い人」など様々です。先ほどの問いに対する回答は一つではありませんが、実はその言葉の中に「その先生らしさ」が見えてきます。

私たち教師には心のどこかに自分が大切にしたい「ものさし」があり、知らず知らずにそのものさしで子どもたちを見ています。これは悪いことではありません。別な言い方をすると、この「ものさし」こそ『授業観』であったり、『教育観』であったりします。

ただ、残念なことに、「〇〇観」というのは、自分の中にあるものなので、段々と固定化されていきます。この固定化された「〇〇観」の最たるものが「価値観」です。今の社会は、多様性の社会といわれるように、同年代、同性、同郷、同職であっても価値観はバラバラです。この価値観のずれは、時に人を疎外したり、人と人の間に争いを引き起こしたりします。共生社会と言われてはいますが、価値観を広げたり深めたりすることが大事だと思います。私たち教師に求められている姿は、文部科学省の答申の中では「新たな教師の学びの姿」として、次のように価値づけています。

- ・変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- ・求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- ・新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- ・他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」

このような「学び」によって、私たち教師も常に『教育観』や『授業観』の見直しを図り、広く、深く子どもたちに接することができる「人間性」を育てていると感じます。

本会の活動にご支援ご協力をいただいております会員の皆様は、正に新たな教師の学びを実践されております。今後とも、この姿勢を大切にしながら教育活動に邁進されることを願っております。

【編集後記】

今号は、年度最終号として冬の研修会の内容を中心とした広報を作成しました。初めての作成となりましたが、無事発行することができました。作成に関わり、多くの先生方にご協力をいただいたことをこの場を借りて御礼申し上げます。次年度もよろしく願いいたします。

【北海道国際理解教育研究協議会広報部】

佐々木 敦史（新得町立新得小学校）
佐藤 弘美（札幌市立星置東小学校）
二本柳 将（札幌市立発寒東小学校）